

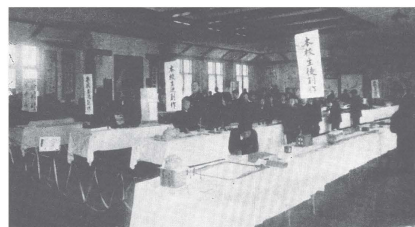
立志開拓創作

五中は最初から変わっていたんだ（2）

真田元校長の話はつづく

創作展覧会——デカデカの見出しで書かれた各社の記事を僕は
思い出す——等々。何もかも型破りで、世人の耳目を聳動した。

理科教育の斬新方法も、当時の国の要望に応じて喝采を浴びた。
こうして、生まれたての学校が一举に東京中の秀才を吸収してし
まったのである。』
〈1949年（昭和24年）〉



五中が変わっているのはこれだけではありません。まずは女性教師陣。**栗山津禰先生**（漢文。大正11年から昭和5年）、**ミス・ジュネビブ・コールフィールド**（英語会話。大正12年から昭和12年）、**物井ハナ先生**（英語。大正15年から昭和4年）の**三人の女性教員**が授業にあたったのです。栗山先生は高等中学校初の女性教師。もちろん男性教師陣も多士済々。

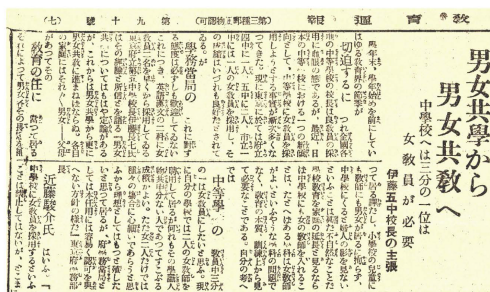
ミス・コールフィールド（アメリカ人）の英語会話の授業や校長の年収に近いレコード教材も使用した
というように、外国語教育への熱の入れようも五中の特徴。



物井ハナ先生



栗山津禰先生



昭和2年2月5日 教育週報

創立した年から昭和13年まで続いた五中の誇るイベ
ント、「**鯉あげ**」も変わっています。

五月五日の端午の節句に、生徒が紙で作った鯉に、
水素ガスを詰めたゴム風船を入れ、長七は、「**アメリカ**
まで飛んでいけ」と唱えて飛ばしたのです。鯉のぼり
はゆっくり、空の彼方に消えていく雄大な行事です。

鯉のぼりが埼玉に落ちたと連絡を受けると、長七は
生徒に向かって、「諸君。この鯉のぼりは、**アメリカ**
から再び埼玉に帰ってきた」と話したとのこと。



五中創設の頃

■五中の教師たちほか

長七はそれまでの公立中学校とは一線を画すユニークな中学校設立を許された。

「立志・開拓・創作」をモットーに自由、自治の精神が五中教育の基本に据えられ、特に理科教育を重視し、緻密な考察力をもって知力、体力の備わった人格者を養成することを最大の目標とした。上級学校受験合格のための知識の詰め込み教育などは決してせず、広く教養を深め、自分自身で考え行動しろという長七の教師になって以来の持論そのものである。

先ず教師陣に優秀な人材を集めた。英語の岩崎民平（研究社英語辞書の編纂者）、音楽の築田貞（「どんぐりころころ」や「城ヶ島の雨」の作曲者）、図画の矢沢弦月など後に著名になる人物を多数採用した。1922年（大正11年）から1926年（大正15年）にかけては漢文の栗山津彌（日本初の男女共学大学〔東洋大学〕に入学した最初の女子学生）や英会話のジェネビーブ・コールフィールド等、日本の教育史上初めて男子中学校の教壇に女子教師を立たせたことも画期的であった。

府立五中のブレザーにネクタイ姿の標準服は、質実剛健の詰襟服姿が当たり前の時代にあって、世の人々を驚かせた。しかも制服ではなく、あくまでも標準服であったので例え詰襟服を着ても服装違反を咎められることはなかった。長七は英国の名門パブリックスクールの校風を範として紳士的に振舞うことを、生徒たちに望んでいたのも、まず服装から入って背広にネクタイという「紳士」としての自覚と誇りを持たせようとしたのである。

長七はまた「熊鶴亀犬猿猫体操」という熊、鶴、亀などとの掛け声のもと、皆で同一の動作はせず、各自勝手に動物の動きを発想し表現するといういかにも長七らしい健康法を考案した。しかしこの体操は、集団で各自勝手に行う動きが特異な状況に見えるようで、残念ながら生徒たちには不評であった。

毎年五月五日、端午の節句の休日に長七は、全校生徒を校庭に集め、鯉のぼりの腹に風船をたくさん詰め、背びれなどにも取り付けて「アメリカ大陸まで飛んでいけ」と叫んで大空に舞い上がらせた。この行事は、生徒たちの胸に熱い思いを満たすことができたようであったって好評であった。

■講話

長七は度々朝の講話で「諸君は若年といえどもジェントルマンである。故にわが府立五中は紳士の学園である。生徒を小紳士として遇するのであるから自覚をもって行動せよ。従ってわが校に罰則というものはないのだ」と話していた。

長七の講話は、いつも長く時には泣きながらの熱血ぶりであったので、初めのうちは辟易しながらもやがては生徒たちの心を揺さぶっていったのであろう。皆のびのびと自己を表現し、自発的に学ぶといった府立五中生独特の生活スタイルを身につけていった。

長七は、ただ学業の知識を得れば良いということではなく、広い教養を身につける大切さを生徒たちに学ばせようと長七お得意のネットワーク力を駆使して、各界の著名人を講話者として数多く招いた。

嘉納治五郎、後藤新平、澤柳政太郎等は勿論のこと新渡戸稲造は1920年（大正9年）から国際連盟事務次長となりスイスジュネーブへ転居しているので、その代わり東京女子大学二代目学長の安井てつ、恵泉女学園創立者の河合道、鉄道省官僚の鶴見祐輔（後藤新平の娘婿で後に政治家になる）等の新渡戸稲造の愛弟子たちが講話者として府立五中を訪れている。

学者では東京帝国大学法学部教授の末広厳太郎や筧克彦らが壇上に立ち、その他、後藤新平東京市長の元で東京市助役、その後東京市長を務めた永田秀次郎、東京女子医科大学創設者の吉岡彌生、外務省課長の武者小路公共（作家の武者小路実篤の兄）、文筆家で歌人の三宅花圃（三宅雪嶺の妻）、諏訪出身の軍人永田鉄山（後に暗殺される）、世界旅行冒険家の菅野力男、麻布学園創立者江原素六、女性運動家の久布白落美といった中学生向けにはもったいないほどの実に高尚でバラエティーに富んだ講話者たちを招いている。

また、近代吟詠の祖と呼ばれる諏訪出身の木村岳風（松木利次）は、人生に迷いこれからの自分の身の振り方を相談しに五中の校長室を訪ねた際、長七にその吟詠力を見出され全国に詩吟を広めることを勧められて従った。長七も木村岳風の活動を助け、五中の生徒たちに講話として吟詠を聴かせる機会を度々設けた。

講話は、五中が創立されてから海外渡航出張の期間を除いて、長七が病に倒れるまで続けられた。

立志開拓創作

国際人たれ

伊藤長七は、生徒に真の国際的教養の必要性を説き、外国語の習得に心を砕きました。

そして、長七自身、数多くの海外渡航を実行したのでした。

五中創立からまだ三年しかたっていない1921年（大正10年）には満州、朝鮮へ。また同年暮れから一年もの間、日本から少年少女の手紙一万数千通を携え、訪れた各地でそれを配ったアメリカ、ヨーロッパ周遊。この時には、長七はホワイトハウスを訪ね、ハーディング大統領と面談しております。

それから五年後の1926年（大正15年）には台湾。さらに翌年の1927年（昭和2年）にはカナダのトロントで開かれた世界教育会議に出席しています。その帰途には、「船を間違えた」と称して、南米に渡り、さらにヨーロッパを回り、シベリアを経て、朝鮮より帰国しているのです。

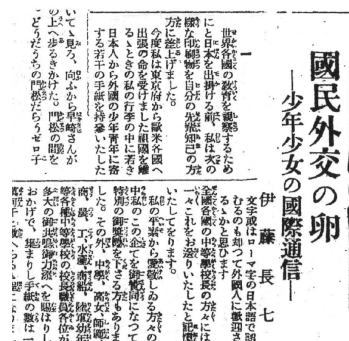
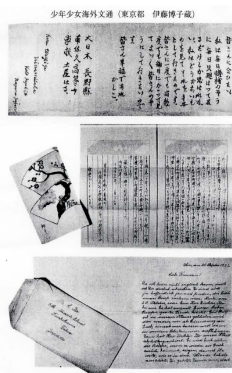


国民外交—少年少女の国際通信 第1回世界周遊

東京府より、1921年（大正10年）10月より1年余におよぶ欧米教育視察を命じられた長七にひとつのアイディアがひらめいた。日本の少年少女の手紙を集め、訪問先の各地の学校の生徒にこれを配り、交流を図ろうというアイディアである。

長七自身多くても数百と考えていた手紙であるが、集まったのは1万数千通。多くは中学生、高等女学校の生徒からの手紙で、ほとんどが英語で書かれていた。

長七は行李に、日本の子どもたちの手紙1万数千通を詰め、サンフランシスコへと船出したのです。



帰国後、これを訪問先の各地で配り、国際交流の一助としたことを、東京朝日新聞に「国民外交の卵—少年少女の国際通信」として寄稿している。（大正12年1月5日より7回連載）

立志開拓創作

国際平和をーワシントン軍縮会議ー 第1回世界周遊

また長七は、この旅の途中、アメリカ東部に滞在中にワシントン会議の公開会議の開催を知ると急遽、ワシントンに向かい、1922年（大正11年）2月4日の公開会議を傍聴。ワシントン会議の中核をなす海軍軍縮条約は公開会議の翌々日の2月6日に締結され、海軍主力艦の保有比は、英：米：日：仏：伊がそれぞれ5：5：3：1.6：1.6と決められた。ワシントン会議終了直後の2月11日に会議の進行役のヒューズ国務大臣と、翌12日にハーディング大統領と面会が実現した。大統領から「両国間の和親、永久に変ざらんことを」の一筆をもらう。



ハーディング大統領

この時、長七は、ワシントン会議の精神を受け入れ、軍事大国ではなく、文化大国への脱皮を五中生に呼びかける手紙を送っています。

「日本は今後自ら開くべき道は多岐にわたる。その第一は、世界の平和を維持し、世界の進歩に貢献することである。日本は、この道に邁進し、世界の平和と進歩のために、自己の力を尽くす。日本は、世界の平和と進歩のために、自己の力を尽くす。日本は、世界の平和と進歩のために、自己の力を尽くす。」

五中生への手紙（小冊子）



ヒューズ国務大臣



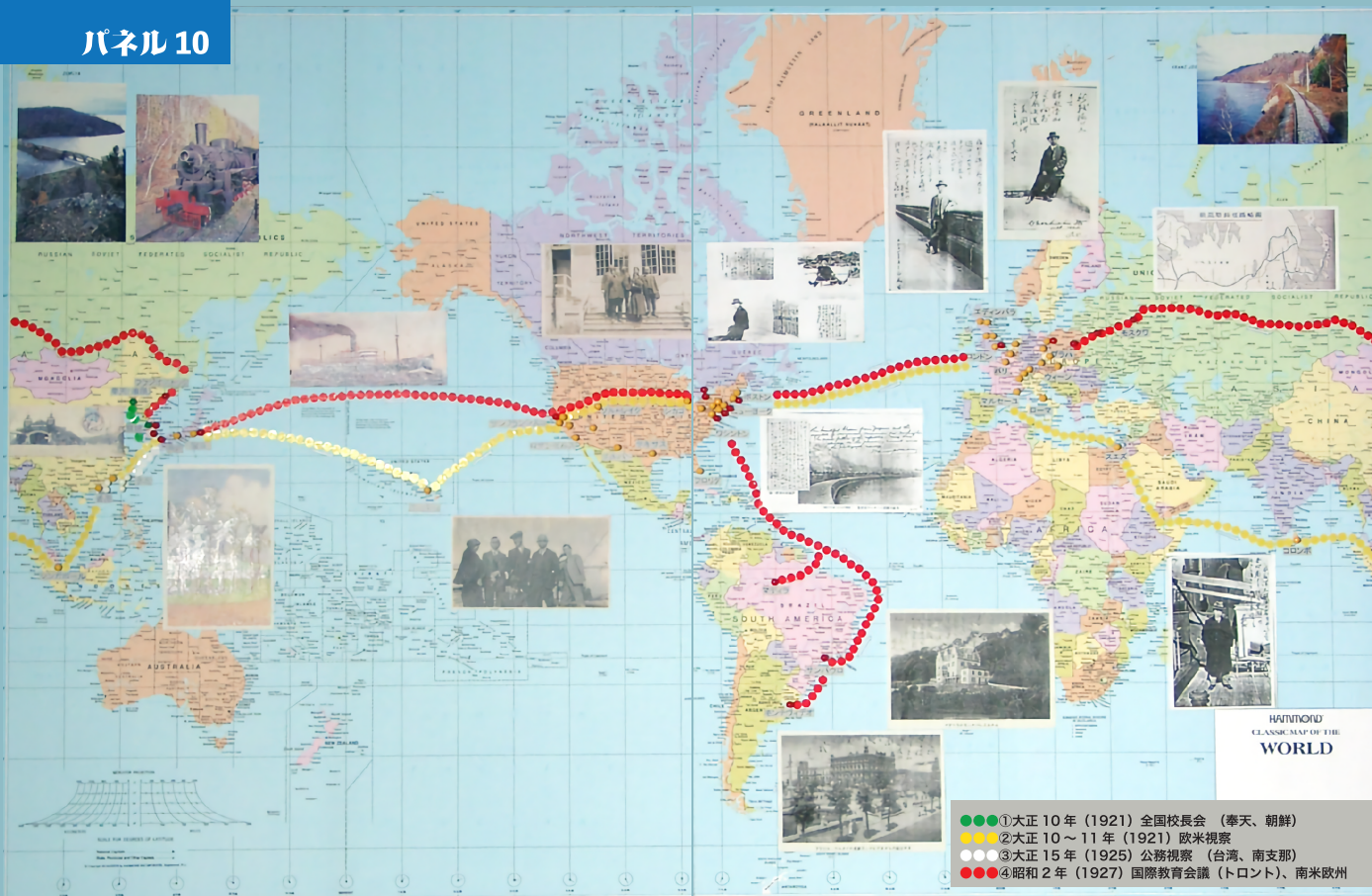
ワシントン会議風景

ー世界教育会議ー 第2回世界周遊

1927年（昭和2年）。この年カナダのトロントで開かれた世界教育会議に参加した長七は、その帰り南米ブラジルの地を訪れる。これは、五中の運営が順調になった後、ブラジルで日本人学校を開設したいという大きな夢があったため。ブラジル駐在大使の案内で各地を周り、詳しい事情を得たとのこと。

長七は、五中生に海外に目を向けさせ、海外に飛躍できる力をつけよと教えたとおり、自分も海外への飛躍を計画していたのでした。





伊藤長七展 2003 85 周年記念事業実行委員会

伊藤長七、世界を駆ける

長七は 1919 年（大正 8 年）1 月、東京府立第五中学校校長の辞令を受けてから、昭和 4 年の元旦、病に倒れるまでのおよそ 10 年間に 4 度、海外出張をしている。その内の 2 回は、「全国中学校校長会議」で、1 回目は 1921 年（大正 10 年）に奉天で行われ、2 回目は 1926 年（大正 15 年）11 月、台北で行われた。長七は台湾各地を回りアモイなど中国本土にも足を延ばし、皆に遅れること 20 日あまり後に帰国した。

驚くのは、2 度の長期海外出張である。

■第 1 回長期海外出張—欧米各国教育視察

1922 年（大正 11 年）11 月 11 日、長七は東京府命令による公務出張で 1 年余に及び欧米各国教育視察旅行に出発した。

長七は、事前に「世界の子もたちと文通」の募集を全国の学校にいる長七の先輩知己の先生たちに依頼して訪問先の各国の生徒たちへの手紙を、日本中の小、中、高校の生徒から 1 万数千通も集めた。

大正時代の公立中学校長の世界一周の外遊は大変珍

しかったのであろう。府立五中「紫友会」の井上角五郎らの評議員や教職員関係者は長七のために盛大な送別会を開き多額の餞別を送った。また長野師範や諏訪、小諸そして東京高等師範附属中学時代の友人や教え子たちが長七のもとに駆け付け、この外遊に際して米国や欧州各国の有力な関係先紹介の労を執った。

後藤新平男爵邸と小川平吉国務院総裁宅には長七の方から出発の挨拶に出向いたが、東京駅には府立五中の生徒たちが見送りに来てくれた。横浜港には長野師範時代の友人の太田水穂や北澤種一、嘉納治五郎の弟子の苦米地英俊小樽商学校教授、留守中の府立五中の一切を託した橘教頭を初めとして沢山の人たちが集まった。日本の少年少女の手紙が詰まった 3 つの柳行李を携えた長七を見送った。

サンフランシスコからロサンゼルスに回り大陸を横断して、ニューヨークへ到着するまでの間に長七は、各地の中学校を訪問視察し文通希望の生徒たちに日本の少年少女たちの手紙を配って回った。

嘉納治五郎の愛弟子で駐米日本大使館外交官の杉村

陽太郎（新渡戸稲造の後に国際連盟事務次長になり、また嘉納治五郎の次にIOC委員になった）の世話で、2月4日の「第6回ワシントン国際軍縮会議」を傍聴出来るようになったため急遽ニューヨークからワシントンへ向かった。米国國務長官ヒューズ卿や英国など各国代表演説を傍聴し、感激した長七は、幣原喜重郎駐米大使にヒューズ卿との面会を強く希望したが到底無理だと拒絶されるも、粘り強く懇願し面会を勝ち取った。ヒューズ卿に「日本の少年少女の書面4千通を既にアメリカ各地に配っています。それは日米の青少年間の親善の目的なのです」と話すと、ヒューズ卿は、大変感激した。長七は、「ハーディング大統領にも是非表敬したい」と願い、翌日ホワイトハウスで第29代米国大統領ハーディング氏との面会が叶った。

ハーディング大統領も長七の日米双方の少年少女間の文通を図る親善行動を大変喜び、長七持参の絵葉書に手書きの文章を書いてくれた。

3月にニューイングランドのプリマスから府立五中の職員、生徒、父兄母姉に宛てて長七は、25頁からなる長文の感動的な手紙を出している。そこにはアメリカに到着してからの詳しい活動報告とアメリカ各地の人々から温かいもてなしを受けたことと、アメリカへの感謝と礼賛を詩的に綴っている。「いよいよヨーロッパに向かうつもりだ」と書いていたがロンドンのテムズ河畔に立ったのは予定より1か月遅れの5月になっていた。

イギリスではロンドンからスコットランドのエジンバラまで回り、ドイツに併合されていたオーストリアのウィーンでは、親友島木赤彦が「アララギ」の同門で留学中の斎藤茂吉に長七の世話を頼んでくれていた。茂吉は、長七をウィーンで一番洗練された女学校に案内した。その学校では、手紙を配る長七に女学生たちが、あたかも鯉が鱧に飛びつくように殺到し、その明るく無邪気な態度に接して長七は大変喜んだ。その後下校時に街でその女学生たちに出くわして挨拶したところ、ちょっと会釈しただけでにこりもしないで歩いて行ってしまった。長七は「ははあ、あゝいう教育をしておるのじゃな、成程いるんな場合を見んけりゃならんな」と言ったというエピソードが、斎藤茂吉の随筆「不断経」に書かれている。

スイスでは、岩波茂雄の紹介で駐在武官の陸軍軍人永田鉄山の世話になった。長七は、澤柳政太郎や諏訪出身の教育者長田新からの影響を受けて、スイスの教育家ペスタロッチを大変尊敬していたため、わざわざペスタロッチのお墓を訪ねて行き、墓の前で〈自分に

とって教師が一番有意義な道だ〉と改めて確認した。

フランス、イタリアでは、学校の夏期休暇中に当たってしまい学校参観が難しかったが、それでも長七は何とか幾つかの学校を探して手紙を渡すことが出来、そして喜んでもらえた。

こうして旅の終わりには、日本の少年少女の全ての手紙を歴訪各国の生徒たちに無事渡すことができたのであった。その内訳は、アメリカ約7千、イギリス約4千、ドイツ約千5百、フランス約千2百、イタリア約7百、スイス約8百、ベルギー、オランダ合わせて約5百通等であったという。

1年余りに及び長七の世界一周欧米視察出張旅行は、当初の目的を無事に果たして地中海から紅海、インド洋を経て1922年(大正11年)12月、神戸港へ帰着した。

■第2回長期海外出張—国際教育会議

1927年(昭和2年)7月初め長七は、澤柳政太郎等と共に日本代表の一人として、カナダのトロントで開かれた「国際教育会議」に出席するため横浜港を出発した。この国際会議では各国の教育者が集って教育問題を話し合い、世界平和を目指すことが目的であった。各国代表が演説する場で、日本を代表する教育者の澤柳政太郎をはじめとして、長七も自説の教育論を演説した。

10日間のトロントでの国際会議が終わった後、長七は帰国の途に就かず、単身キングストン町から川船でセントローレンス川を下りボストンを経てニューヨークの港で「船を間違えた」と言ってブラジル行きの船に乗った。船を間違えたというのは方便で長七は、周到にブラジル視察の計画を立てていた。

長七自身も予てから海外教育活動構想を持っており、嘗て親友の太田水穂にブラジルに日本移民のための一大都市を作って私立大学を作りたいとの夢を語っていたことから南米視察は願ってもなかったことだろう。

帰りは航路でイギリスに着き、フランスから陸路でドイツに回り、ソ連のモスクワからは、開通したばかりのシベリア鉄道に乗ってウラジオストクへ行き、南下して京城を経て釜山港から乗船し神戸港に12月末に帰国した。好奇心溢れ進取の気性を持つ長七らしい世界一周旅行であった。

そして長七が神戸に帰着したその日に、トロントからは別行動をとっていた澤柳政太郎が、外遊中に悪性の猩紅熱に罹患し死去した。

立志開拓創作

長七没す。されど・・・

五中創設という一大事業を成し遂げつつあり、更に海外に新たなる学校を建設しようという次なる自らの夢を追い求める長七に、病魔が襲い、1929年（昭和4年）6月末肺炎（実は結核）で入院。翌年の4月19日に療養のための転院先の平塚の杏雲堂病院で没す。享年54歳。五中は**学校葬**で長七を送り、翌年**胸像**を作る。

長七の小諸での教師時代は1年と短いものの、その後も「立志同級会」を作り長七を師としていた小諸小学校時代の教え子たちは、一周忌の1931年（昭和6年）に、東郷平八郎の揮毫の**伊藤寒水碑**を小諸市郊外の小諸善光寺境内に建立した。

戦後、1965年（昭和40年）には、諏訪市長、長七が校歌を作詞した諏訪中学の出身者を発起人とし、長七生誕の地の諏訪市四賀に**伊藤長七頌徳公園**が建設された。公園内には、諏訪中学の出身の彫刻家、清水多嘉示氏による長七の**胸像**と「創作開拓」のレリーフを巨石にはめ込んだ頌徳碑が置かれている。



建立時の伊藤寒水碑



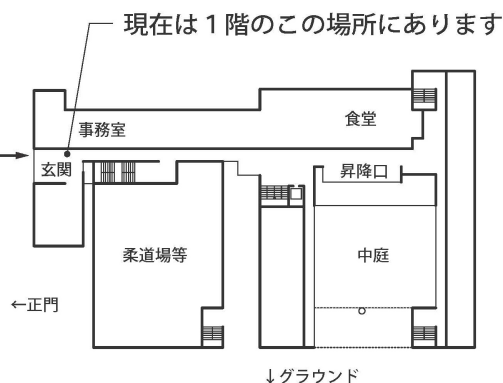
現在の伊藤寒水碑



諏訪市、伊藤長七頌徳碑



胸像落成式



長七没す。されど・・・

■長七没す

1929年(昭和4年)の元旦、長七は結核性肺炎の発作を起こし倒れた。そんな矢先の5月下旬に四男晴が急性虫垂炎の手術入院をし、妻のふゆは病院に泊まり込みで介護にあたっていた最中に、食中毒によって急逝してしまった。45歳の若さであった。

ふゆの突然の死は、長七に大きなショックを与え、また病を押して葬儀に参列したことも重なって急に病状が悪化し、東京帝国大学病院の真鍋嘉一郎内科に入院することになった。真鍋は、四国松山中学時代の夏目漱石の教え子で、大正天皇や浜口雄幸の主治医を務めるほどの高名な教授であった。しかし長七は、病室に巻紙を持ち込み、寝たまま一日50本もの論文を書くなど安静にしておらず、真鍋教授の制止の言葉も届かなかったようで病状はますます悪くなっていった。

やがて転地療養を勧められて湘南平塚の杏雲堂病院に移った。転院しても弱っていく体力の中で長七は「すこやかなる心身へ」の執筆を止めなかった。

1930年(昭和5年)4月19日、伊藤長七は転地療養の甲斐もなく力尽きて、愛する妻の元へ1年も待たずに逝った。享年53歳であった。

■伊藤寒水碑

小山邦太郎は小諸の長七の教え子たちの集まり「立志同級会」会長でもあったので、長七を度々困らせた生徒、暴れん坊の依田巻人から立志同級会の皆で長七先生の頌徳碑を作ろうと提案され、それを受けて頌徳碑建立のために尽力した。

長七は当初、自分の頌徳碑などとてもないと固辞していたが、教え子たちの熱意に負けて、「では一切お任せしよう。けれど目立たない簡素なものにしてくれよ」と言って受諾した。

しかし長七の親友太田水穂の助言もあって邦太郎は、やるなら大きく立派な物にしようと、表の題字の「伊藤寒水碑」の揮毫を東郷平八郎元帥邸にまで依田巻人と一緒に頼みに行った。東郷元帥から「よくわかりました。当代随一の教育者伊藤長七君を慕う諸君の情熱に東郷も胸打たれました。私で良かったら喜んで書きましょう」との快諾を受けて、邦太郎は東郷邸を辞去した瞬間、嬉しさのあまり依田君と二人で抱き合って泣いたと述懐している。

「伊藤寒水碑」の裏面には、「立志同級会」の皆に指名された邦太郎が、斎戒沐浴し錬磨の上に長七の「小諸を去る辞」の一節を書き上げた。

「伊藤寒水碑」は、残念ながら長七の生前には間に合わず、一周忌にあたる1931年(昭和6年)4月に小諸市郊外の小諸善光寺に建立された。

■伊藤頌徳碑

長七が没してから35年後の1965年(昭和40年)、長七から直接教えを受けていない(長七作詞の校歌は熱唱していた)諏訪中学の出身者たちが中心となり、長野が生んだ教育界の先駆者、伊藤長七の記念碑を建立しようということになった。

岩本節治諏訪市長、清酒「真澄」の宮坂醸造株式会社社長の宮坂伊兵衛、諏訪医師会会長寺島清七の3人が発起人代表となり、小諸は小山邦太郎、小川平二の2代表、東京は紫友会代表真田幸男らの協力によって募金活動が行われた結果、諏訪中学出身の彫刻家、清水多嘉示が制作した、長七の胸像と自筆の「創作開拓」の文字のレリーフを巨石にはめ込んだ見事な頌徳碑が建立された。

場所は、茅野駅と上諏訪駅の間地点を少し登った諏訪湖を眼下に見る高台で、周りをつつじなどで植樹された頌徳公園と名付けられた中にある。

■伊藤長七胸像

現在も校舎玄関に飾られている胸像に関して、次の逸話がある。

2009年(平成21年)9月1日の防災の日、当時の石原慎太郎東京都知事が小石川中等教育学校を訪れたことがあった。玄関から勢いよく入ってきた石原都知事は急に立ち止り、隣の栗原卯田子校長に、「ここは公立学校だよ」と訊ねたという。その目は正面の「伊藤長七胸像」を凝視していた。公立学校の正面玄関に立派な胸像が据えられているとは想像もしなかったのだろう。都立学校250校余を統括する都知事を驚かせるほどに、都立学校内の胸像は珍しいかもしれないが、小石川が他とは違った校風と伝統を生み出す学校経営を行ってきた証左かもしれない。

立志開拓創作

没してもなお語りかける長七の言葉

あなたに、74 年前（注：2003 年時点）、病床で書きつづった長七の言葉に耳を傾けてほしい。この情熱と信念と平和への希求を。

- ① 日本の国民として、昭和の世界に生きんとする若き男女には、どうしても系統的に、またきめ細やかな国際的教養を施さねばなりません。一口に国際的教養と申しますと、洋食の食べ方を器用に、外国語を手際よく口に、気の利いたハイカラ振りに身支度するというような、その種の躰をすることのように思いこむ人々が少なくないと思いますが、これは大間違いであります。洋食の食べ方も、身支度も、外国語の運用も、むしろ第二、第三のものであり、国際教養上、第一に重要視すべきは

純真なる人類愛の心

正義、人道に終始せんとする信念

に生きんとする心の姿を育てることあります。

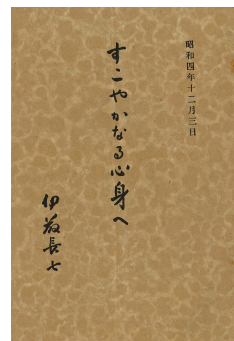


- ② 国と国と相対立して、軍事のみならず、学問、産業、各方面に競争のしのぎをけずりおるのが、私どもの眼前に見る世界の事実であります。けれど、それとあべこべに、国際連盟の内容が、年々醇化せられ、国際協調の各種の催しが創設せられ、国際善意デーなどのやさしい仕事が、至る所に美しく挙行せられ、やがて不戦条約が列強の間に調印さるる気運も生まれ出た、という現実を見逃すわけには参りません。すなわち、今より後に戦争は断じて無し、などとは何人も断言しえざるごとく、世界列強、各民族の間に、平和運動、人類愛の現れが、年々その新たなる姿を見せていると言うこと、これまた何人も否定できぬところであります。

私たちは、初等教育から中等教育の時代において、若き男女を、正しく、国際的に教養し、彼らの先輩たる日本国民が招きし不面目と失敗とを、彼らには繰り返さしめたくないものであります。むやみに日本ばかりよい国であるなどと教えぬように。また、わざと日本の気候風土が世界に冠たりというような独断を言わぬよう。特に、海を隔てて相隣りせる、アメリカ、中国、ロシアなどを、頭から台無しに悪く言うような、失態なからんことを切望します。

我が産業の行き詰まりを救う道も、人口問題の解決も、我が国民の心の鏡に、今や投げかけられたる暗影をはらう道も、上述のごとく、若き人々を国際的仕立てとすることが、その主眼の一つであると、私は中心より考えております。

〈1929 年（昭和 4 年）〉



以上の文章は昭和 4 年 12 月 3 日に配布された「すこやかなる心身へ」（長七最後の小冊子）よりの引用。この年元旦に発病し、6 月入院、翌年 4 月に死去している。

長七が残した長七の思いを伝える小冊子類

長七展の十数枚のパネルの誕生に、奇跡と言っている出会いがあったことをご存じだろうか？

■長七小冊子類との奇跡の出会い

2002年4月だったと思います。伊藤長七の出身校である長野県諏訪清陵高校の卒業生の方々が伊藤家と接触するなかで、長七のご子息の國男さんの次女、伊藤博子さんのお宅に、未整理の長七の資料が柳行李 7、8 箱もあることが判りました。國男さんが戦争中も大事に保存されていたものです。家を建替えるための片づけ中に出てきた資料の整理を手伝って欲しいという話が、同窓会元会長で伊藤長七の研究をなさっていた粕谷一希さん（旧制26）と当時副会長の寺門克さん（06）

に舞い込んだのです。100 年位前からの資料がありました。手紙類は巻紙。何重に巻かれた巻紙に一字も書き損じがない。ただ、困ったのは最後まであけないと、誰から誰にアてたのか、何年何月何日に書かれたのかすら分からない。資料整理をしていて、そこに伊藤長七がいるということを感じました。また、正岡子規や島崎藤村とか広い交友があったこともわかりました。

この仕事が「私の五中・小石川さがし」にうまく結びついていった。記念 CD にしろ、「長七展」にしろ、そこから出てきたのだと思います。早くてもだめ、遅くてもだめ。めぐり合わせという気がします。

こうして記念 CD と長七展が誕生したのです。

■小冊子類の紹介

小冊子類は 22 冊が残っており、2022 年にはそのレプリカを作り学校に寄贈しました。記念 CD およびパネルに引用された冊子 7 部の表紙を、抜粋内容を含めここに紹介する。⑦ の表紙は左パネルを参照してください。

①府立第五中学校入学式告辞（1920 年・大正 9 年）

立志とは、昔、支那代の大聖人、孔子が十有五で志を立て、学問を始められたように、高等普通教育を受けるために中学校に入学する志を立てることである。

②開拓の精神とは何ぞや（1927 年・昭和 2 年）

かのマゼランの世界一周、かの博士ヘディンの中央アジア探究、あるいはナンセン博士の極地探検、いずれが開拓の精神の発露にあらざらん。

③パリからの手紙（1922 年・大正 11 年）

創作とは、自分の力でできるだけの仕事を、自分でなし、自分で考え、自分で工夫し、他人のまねでない、何かを作り出すということである。

④ニューヨークからの手紙（1922 年・大正 11 年）

ここに一言申し述べねばならぬことは、「東京五中の天才教育方針」という言葉であります。東京五中は全人間的教養を標榜しておりますが決して天才教育を標榜いたしません。

⑤プリマスからの手紙（1922 年・大正 11 年）

思慮に基づける軍備縮小のために、我が政府および国民は、誠意を傾けて努力する必要がある。軍備縮小後、今からは一層多くの力を文化政策にいたすべきである。

⑥自治之國東京第五中（1927 年・昭和 2 年）

なすべきを自らなせ / 学ぶべきものを自ら学べ / 天下に率先して、自ら治る精神を發揮せよ / 天下を動かさんとするものは、まず自ずから動かずんばあるべからず。

⑦すこやかなる心身へ（1929 年・昭和 4 年）

日本の国民として、昭和の世界に生きんとする若き男女には、どうしても系統的に、またきめ細やかな国際的教養を施さねばなりません。



立志開拓創作

長七に聞いてほしい私たちの言葉 長七の精神は今も

1929 年（昭和 4 年）伊藤長七校長の時代「ある少年 - 心理学者の自伝的回想」乾 孝（思想の科学社）

年に一回、上から現役将校が「査閲」にやってくる。全校生徒を正方形に集め、真ん中の壇の上に立って生徒に試問した。「何年何組何某。軍備はなぜ大切か」。指名された生徒は「軍備はいりません」。怒った将校は「何組の何番の誰。我が国肇国の精神は何か」。「世界の平和であります」。
校長は窮地に立たされるが、生徒にはその後何一つ注意しなかった。

1936 年（昭和 11 年）落合寅平校長の時代「じーちゃんの思春期」武田 専（出版芸術社）

入学式校長挨拶で「五中の建学の精神は、開拓・創作であり、モットーは自由の尊重である。自らの判断で選び取ったことに責任を持つことがほんとうの自由です。
先生方を『さん』づけで呼ぶのが五中の伝統です。登校の途中で上級生に会っても先にあいさつする必要はありません。必ず先に上級生が帽子を取って『おはよう』とあいさつしてくれます。下級生の人格を尊重し、下級生をいたわるのが五中の校風です」

1950 年（昭和 25 年）澤登校長の時代

80 周年紫友同窓会トークショウ

サッカーはフィールドに出たら全て自分で判断するわけです。監督から右へ蹴れとか左へ蹴れとかいう暇もない。自分で局面を開拓しその局面を創作していくわけです。「こういうスポーツを学校の中心のスポーツに据えられたこと自体、学校の考え方というものがそこに生きていたんだな」と痛切に感じます。

「2ちゃんねる」チャットより：小石川高校を巡る幅広い世代の意見交換が見られます。以下はその一例。

- ☆ 文武両道。うちの学校でも、日比谷、戸山なんかより小石川が断然人気です。校風が素敵みたいです。（01/12）
- ☆ 小石川 何か応援したくなる。明朗快活な子供たちというイメージ。生徒さんは屈託がなく本当にいい印象です。（02/01）
- ☆ あの自由な雰囲気にならされてしまうと遊んでしまうでしょう。生半可な大学より自由です。（02/01）
- ☆ 人を中身や個性で見ることでできる人が多かった気がします。自分はこれから高校受験をする、豊かな高校生活を望む人々には自信と誇りを持って小石川を薦めます。（02/01）
- ☆ 小石川の良いところは、全てを受け入れてくれるところ。悪いところを注意するのではなく、良いところを認めあうので、自分を持っていない人は馴染みづらかな。進路に関してもしかり。全てが自己責任。（02/02）
- ☆ なんか2ちゃんにしては珍しいくらい肯定的なレスが多いですね。ここ。関係者の方々の回答も非常に親切ですし…つまり小石川って、それだけ素晴らしい学校だということでしょうか。（02/02）



ある日の実行委員会出席者

長七の精神は今も

長七展パネルは、長七の存在すら知らなかった私たち教え子たちの、五中・小石川の思い出を語る言葉で幕を閉じていました。私たちの五中・小石川時代にも長七が残した贈り物がたっぷりあったことを感謝したためであった。

パネル作成後に見つけた言葉とエピソードを紹介する。

1979 年 (昭和 54 年) 卒業生の言葉

校則を押しつけることのない学校。型にはまった目で私たちを見ていない担任。そんな中で自由に三年間、人生最良の時を過ごすことができた。

1979 年 (昭和 54 年) 卒業生の言葉

20 年ぐらい前は学園ドラマが人気。先生が生徒たちと毎日一生懸命生きていく。所詮ドラマで現実にはそんな学校などあるはずはないと思っていた。小石川にはいるまでは。当時の日記、夏休みの初日「今日からつまらない夏休み」と書き出している。

こんなエピソードも残されています

1978 年 (昭和 53 年)。クラブの顧問も参加したコンパで酒を飲んだ A 君。何とか終電に間に合ったものの電車で寝込み、一駅乗り過ごしてしまう。逆の電車も終電は出た後。A 君は線路を歩き始める。そこへ回送電車が・・・。

告別式で、息子を亡くした父親は、「あの子はいつも小石川を礼賛しておりました。学校へ行くのが楽しくてしょうがない、こんなに生徒が伸び伸びと、好きなように自分を伸ばせる小石川にきてほんとうによかったと常々申しておりました。あの子が好きだったのは自由な小石川でした。あの子が犯した過ちで、自由な小石川の締め付けが厳しくなり、他の生徒さんたちが今までのように自由が謳歌できなくなったらあの子は浮かばれません。

先生方をお願いします。どうか小石川が今までの通りでありますように。今度のことで自由な小石川が変わってしまわないように、くれぐれもお願いします」

英国人 Peter Cave 氏が伊藤長七の研究に学校訪問

2025 年 1 月、マンチェスター大学近現代言語文化学
科准教授のピーター・ケイブ氏 (学校教育に関する研究者) は 20 世紀前半の男子中等教育を対象にしている
そうです。氏は旧制東京府立第五中学校に関する文献
や資料をネットで調べ、特に初代校長の伊藤長七が日本
の教育に深く影響を与えた偉大な教育者と感じたとの
こと。氏が東京大学の研究員として 2 週間の滞在中
に同窓会事務局の仲介で学校の資料室を閲覧しました。
同窓会からは百年誌と「我らは伊藤長七の教え子
だった」を贈呈しました。

紫友ニュースレター 36 号 (2025 年 1 月) より

ジュネビーブ・コールフィールドのその後

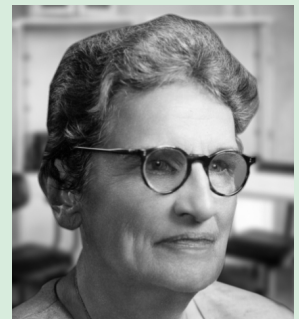
五中在職期間：1923 年 (大正 12 年) 11 月～1937 年 (昭和 12 年) 2 月

担当教科：英会話

コールフィールドは、ウィリアム・ウオレン著 (吉野勇一訳) の「失踪」 (第三書房昭和 54 年刊) に登場している。タイのシルク王と言われた米人ジム・トンプソンが 1967 年にマレーシアで失踪した物語。彼はタイのバンコクで盲人協会学校を創立し経営するコールフィールドを尊敬し、観光名所のトンプソン家の観覧料を全て寄付している。彼女の学校には 6 歳から 14 歳までの盲目の生徒 150 人が学んでいる。学校の創立は五中をやめてまもなくの 1939 年。1956 年から 1960 年まで、ベトナム政府の招待により視覚障害児のための学校と少年のためのリハビリテーションセンターを組織した。

1961 年に、アジア地域で社会貢献などに傑出した功績を果たした個人や団体に対して贈られる「アジアのノーベル賞」とも呼ばれるラモン・マグサイサイ賞を受賞。1963 年にアメリカ大統領自由勲章を受章。1972 年に 85 歳で亡くなった。

「我らは長七の教え子だった一五中・小石川初代校長伊藤長七に学ぶ」より引用



立志開拓創作

謝 辞



「目で見える我らは伊藤長七の教え子だった」は、伊藤家からの資料の他、多くの方々のご協力で実現できました。

ご協力者または参考にさせていただいた資料の一部を紹介することで、感謝にかえさせていただきます。

展示資料

伊藤家 多数の資料の提供をいただきました。本資料は伊藤國男夫妻が戦渦を超えて守ったものです。

参考資料

「寒水 伊藤長七伝」 矢崎秀彦（鳥影社）／「世界と地域を見つめた長野県教育」（長野県立歴史館）／「半世紀」小石川高校創立 50 年記念誌（紫友会）／「立志・開拓・創作－五中・小石川高の七十年－」（都立小石川高等学校）／「小石川高校新聞縮刷版 1」（都立小石川高等学校生徒自治会）／「図説教育人物事典」唐澤富太郎編著（ぎょうせい）他

85 周年記念事業実行委員会

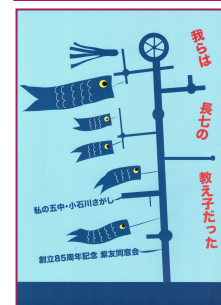
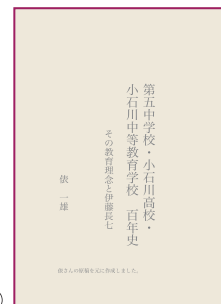
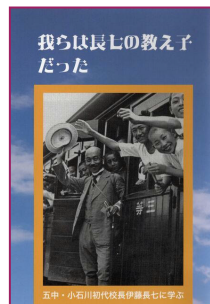
編集を終えて

2003年5月24日一日限りの催しと考えていた「創立85周年紫友同窓会」の企画の一つ「伊藤長七展」であるが、その後も学校行事の「創作展」で会場でパネルの展示が継続していると聞く。担当した者にとってこの上ない喜びです。この冊子はパネルと解説からなります。その解説は次に紹介する書籍等から引用させていただきました。

①「我らは長七の教え子だった―五中・小石川初代校長伊藤長七に学ぶ」(2022年刊)、第一部「伊藤長七物語」(川口由紀子作)より

この書籍は長七の22冊の冊子のレプリカを学校に寄贈した際に編まれた書籍で、7冊の長七の残した冊子全文、長七展パネルと「伊藤長七物語」の3部構成です。本冊子はこの「伊藤長七物語」より、7、9、15、17、20、23ページの解説として引用しました。

俵一雄氏からいただいた②「第五中学校・小石川高校・小石川中等教育学校百年史 その教育理念と伊藤長七」から「現代教育観」(7ページ)、五中誕生(9ページ)の補足説明、および長七胸像のエピソード(23ページ)を引用しました。



③「我らは長七の教え子だった」(2004年刊)より

85周年同窓会の翌年にまとめられた記録誌です。85周年同窓会当日全般のこと(5、11ページ)、長七の残した冊子のこと(13ページ)、長七展の担当者の言葉他(25、27ページ)を引用しました。

パネルと資料の閲覧

■パネルの閲覧

長七展パネルは、現在は小石川中等教育学校の創作展の会場でしか見ることはできません。でも、お手元で簡単に見ることができます。

① 紫友同窓会ホームページ <https://www.shiyu-dousoukai.jp/index.html> から。次のようにたどれば伊藤長七展のすべてのパネルを見ることができます。トップページ上段メニューの右端の「アーカイブ」/周年行事部会/創立85周年記念同窓会/中段の「3階フロアーで行われた伊藤長七展」の写真をクリック。

また右上のQRコードでパネルを直接見ることができます。

② 五中・小石川デジタルアーカイブから。右下のQRコードで本冊子を見ることができます。



紫友同窓会ホームページでパネルを見る

■長七の残した品々

ところで本冊子25ページに書かれている長七の資料は、その後出身地長野の県立歴史館(千曲市)に寄贈され、大切に保存されています。ご子息の伊藤國男氏(元練馬総合病院院長)によって自宅が消失する戦火の中守り通した膨大な(2000点近い)長七の一次資料は、85周年の長七展のあとお孫さん伊藤博子さんのご努力で、厚い自然木の板に包まれた収蔵庫に安住の地を得ました。その目録は歴史館のホームページで確認できます。また、千曲市の歴史館を訪ねれば、直接閲覧することもできます。

歴史館 URL (研究者対象) <https://www.npmh.net/purpose/study.php>



デジタルアーカイブスにて本冊子を見る



目で見る 我らは長七の教え子だった 伊藤長七展・パネル編

2025 年 9 月 初版発行

企画・編集 紫友 85 周年会編集委員会

小駒 清 柴田知彦 川口由紀子 横山とみ 吉川光子

発行者 紫友同窓会 85 周年会

文京区本駒込 2-29-29 東京都立小石川中等教育学校内

紫友同窓会事務局 Tel/Fax 03-3945-1961 (同窓会直通)

印刷・製本 西武写真印刷株式会社